

## としよりのひやみず

岡 山 俊 雄

年寄りの冷水と思いながら、あるいは息抜きとか、焼きもどしのためと称し、時には、若返りの薬さなどといって、フィールドへ出かける。

去年は10月末から、石鎚山断層崖の麓へ行った。昭和37年の日本地理学会の大会のエキスカージョンで、はからずも、この大断層崖が最近まで、ことによると今もなお、成長しつづけているらしい手がかりをかいま見てから、4年目にあたる。新居浜と土居を根拠地に、正味6日間、断層崖を刻む大小17本の谷を、1本ずつ、少しさかのぼっては引き返し、崖下に丘陵が附着していると、それと断層崖との間を、通り抜けようとした。というのは、ヤブがひどくて、あともどりをしたこともあったからである。

何よりも、天気恵まれて、連日、青い空らしい空を仰げたのが嬉しかった。全く、生き返った思いだった。小規模な長瀬式の峡谷——それが断層崖の下端でブツ切りになっていた——を、そんな必要もないのに、あちこちと渡り歩き、飛沫をあげる急湍の清冽さ、浄瑠璃のよどみに映る逆光を受けた黄葉のさやけさ、水に洗われた結晶片岩の色とりどりの美しさに、見惚れたり、眺め入ったり、ヒスイが縞模様になった結晶片岩に初めてお目にかかって、御機嫌だったりした。不思議なのは、10年あまり前から、フィールドから帰ると、いつも体重がふえていることである。東京の生活がどんなに有害かという一証なのだろう。

私立大学の教師は、フィールドへは、夏休みか秋の大学祭の時でないとは、まず出かけられない。春は、入試だけでも一部・二部・編入転部・修士・博士と追い打ちがかかり、一段落ついて気が弛るむとたんに寝込むこともあるくらいだから、フィールドどころではない。ことに今年は、スト騒ぎのあおりで、学内試験と入試とそのあと始末が、混沌と微妙にからみ合って、腹を立てる気さえ起らなかった。ついに4月中旬、はかなき抵抗か、せめてもの心やりかはともかく、やり繰りをして前後4日、飛驒金山へ抜け出した。

新幹線と急行を併用すると、飛驒の国まで4時間たらず、というのは、こういう場合には有難い。だが、今度は雨ばかりで、晴れたのはたった1日。しかし、フィールドで能率をあげようなどという殊勝な心がけからは、とうに卒業している。コーモリガサをさして、学校帰りの小学生達と話をしながら砂利道を歩いたり、盛りを過ぎた桜の雨に散る花びらが、深い谷底の濁りぎみのあおい水面に、ゆらりゆらりと舞いくだるのをぼんやり眺めたり、少し登ると、まだ真白な御岳が、思いもかけず望まれて、息をのんだりした。

金山北方の山背上の1細谷は、予想どおり、断層で下流部が上り、上流側が埋積されていた。広くもないその埋積谷底が、如何にも日本らしく、水田化されていたことは、残存する畦畔で明らかだが、それも今は放棄されて、草茫々である。その、まだ萌えぬ枯草原の一隅に、こんな所にも住みついた人があった名残か、紅梅が1本、こぼれるばかりに花をつけて、昼の光に静まり返っていた。私は丈の高い枯草を分けて行き、色も美しさも和菓子のような紅梅の花を近々と仰ぎ見、すぐうしろの流れの水を手で掬んで飲んで、この小天地のかつてのあるじも、こうして喉をうるおしたことがあったに違いない、と思った。

## 若くありたい

幸 田 清 喜

商売柄、「ききとり」に生涯をかけてきたので、私はいままで各地で各様の人々に広く逢ってきました。初対面でこのようなタイプの人らしいと一応見当をつけ、さてききとりが終ってから考えるとはじめの見当とちがっている場合が多い。カンがにぶいせいか、私の場合最初の印象なるものがどうもあてにならない。大体において愛想のよい人は誠意が足らず、面貌の怪異に似ず心があたたかいといった人が多いように思えて、造化の妙に敬意を表したくなります。いんぎん無礼というのがどうも一番扱いにくい。ブッキラボーにボツリボツリ話し出し、その話に内容があり、味があるといった人に出逢うと楽しくなる。はじめいばっていたのが後にかぶとをぬぐと、こちらの方が戸惑うことがあります。

北陸絹業地帯を歩きまわっていたときでした。組合の事務室で統計をうつしとっていると、係の方がこの町に立志伝中の機屋さんがいていま組合長をされており、小学校四年しかでないが偉い人だ。是非あってほしいということで、仕事半ばに奥まった畳の間でおあいした。なるほど年は60才位、端正な姿で理路整然と当地機業の推移と現況を説かれる。こういう人は一体いつどこでこれだけ勉強されるのだろうかと驚くほかはありませんでした。そういばった風にもみえないが、自信は満々のようにでした。さて説き去り説き来ったところで、今の若い者は……と例のセリフが出てきました。私はすかさず「あなたも年をとりましたね」というと、「まだ若いつもりだ。どうして老人か」と、そこで私「あなたはおとうさんからいつもこれを言われ、老人何をかいうと反感さえ持ったと先程言われた。にも不拘、駄目だ駄目だといわれたあなたは立志伝中の人、今おとうさんと同じ事を言う。御若いつもりでも実は老人。」と言うと、この人は突然襟を正し坐り直して私の前に深々と頭をさげ、「教えを忝じけなく思う。以後このことは絶対口にすまい。いつまでも若くありたい。」と。私は目のやり場に困りました。この姿にこそ立志伝中をみつけた思いですがすがしく、そして